

題目：安心状況の経験は本当の信頼行動を生むのか？

氏名：竹川 雄大

指導教員：高橋伸幸

人はつきあいのあった相手とこれっきり会わないとわかっている状況で、その相手を信頼するのであろうか。相手とのつきあいがこれっきりの場合であれば、裏切ることが相手にとって一番利益を得られる方法である。そして、もし相手が裏切るのであればその人を信頼することは「愚かな」選択になるであろう。しかし、人は、裏切られる誘因のない安心状況で相手と信頼関係を形成すると、裏切られる誘因のある信頼状況でも相手を信頼してしまうことが寺井・森田・山岸（2003）の研究で示された。それでは、なぜ、そのように人は相手を信頼してしまうのであろうか。本研究の目的はその理由を明らかにすることである。人が相手にとって裏切る誘因のある状況でもその相手を信頼してしまう理由としては、主に以下の2つの可能性が考えられる。1つ目は、信頼状況であるにもかかわらず、安心状況の経験から、相手を良い人だと思ってしまうためにその相手を信頼するという可能性である。2つ目は、信頼状況であるにもかかわらず、安心状況の経験から、信頼状況を安心状況だと勘違いをしてしまうために信頼行動をとると言う可能性である。これら2つの可能性を検討するために、実験室実験を行った。その結果、人が信頼状況で信頼してしまう理由は、安心状況の経験から、その人を良い人だと思ってしまうためであるという可能性が支持された。また、安心状況で信頼関係を形成した人であれば、たとえその人が自分と相互作用したことの無い新規な他者であっても、信頼状況においてその人を信頼することが示された。これは、その人を良い人だと思ふ効果の他に、安心状況の経験から信頼状況も安心状況だと勘違いした効果がはたらいてその相手を信頼した可能性を示唆している。